

21世紀へ向けての図書館情報学科

図書館情報学科教授 野添篤毅

私が図書館情報大学に勤務することになる少し前に、当時、慶應義塾大学で教えられていた津田良成先生から、名古屋で新しい図書館情報学科を創設するとの構想をうかがいました。その後、先生は何回となく、新しい学科についてのプランを私達に熱心に語られました。その構想には先生のこれまでの医学図書館を中心とした幅広い情報サービスの実践と、その実践を踏まえた研究開発活動、そして図書館情報学の教育研究に、裏打ちされた壮大なカリキュラムが盛り込まれていました。

その後、私はつくばで教育研究に携わることになりましたが、わが国で3番目の図書館情報学専門の教育研究の場として設立された本学科について、常に関心を抱いてきました。そして、この10年の間に本学科には修士課程そして、博士課程が次々と整備され、学部、大学院（博士課程前期・後期）という一貫した教育研究体制が完成しました。これは本学科の教員の努力とそして大学当局の支援の賜物でしょう。

学科の基礎作りの10年間から、21世紀に突入する次の10年、本学科はどのような方向に歩んでいくことが必要なのでしょう。現在の図書館情報学を取り巻く環境は著しく変化しつつあります。それを端的に表しているのがインターネットという怪物の出現でしょう。この怪物によって我々は色々なファイルやデータベースに瞬時にたどりつくことができるようになりました。そして、インターネットを利用したデジタル図書館という構想も唱えられています。このような変化の中で我々はどうやって歩んでいったらよいのか、次の10年を確実に見据えていかなければなりません。

今年の5月のワシントンD. C. で開かれた国際医学図書館会議の「医学図書館員の教育に関するセミナー」では、図書館情報学の教育の重要性が再確認されました。また米国国立医学図書館(NLM)からは「医学図書館の教育研修に関する報告書」が発表され、医学図書館協会と図書館情報学の協力による新しいカリキュラムの実現を目指しています。

本学のカリキュラムも新しい時代へ向けての改訂が必要とされているでしょう。また、外に向けては、現職者の卒後教育、生涯教育を図書館専門団体などと協力して行なうことが期待されています。また、国内ばかりでなく海外も含めた同じ系統の学科との研究協力、そして教員の交換、学生の交流などを計ることも考えねばなりません。

次の10年を我々にとって変化に富んだ、そして意義あるものにしていかなければなりません。